



TITLE:

京大広報 No. 207

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 207. 京大広報 1980, 207: 37-42

ISSUE DATE:

1980-12-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209479>

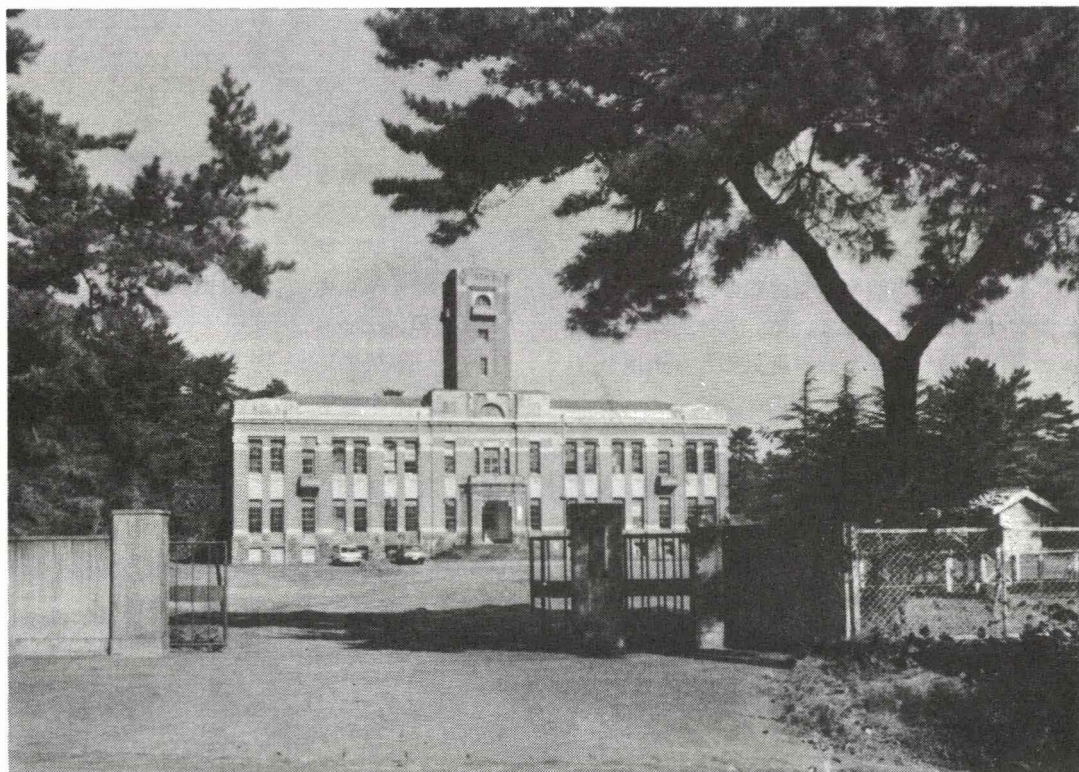
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 207

京都大学広報委員会



理学部・地球物理学研究施設本館—関連記事本文40ページ—

目 次

身体障害学生相談室の設置.....	38	〈紹介〉	
共通第1次学力試験の実施計画.....	38	理学部・地球物理学研究施設.....	40
公開シンポジウム「80年代の母」.....	38	〈随想〉	
原子エネルギー研究所公開講演会.....	39	上野文庫のこと	
創立15周年を迎えた東南アジア研究センター.....	39	名誉教授 出口 勇蔵.....	41
		計報・日誌.....	42

<大学の動き>

身体障害学生相談室の設置

昭和55年10月1日、本学に身体障害学生相談室が設置され、初代の室長には、熊本水頼教授（教養部）が任命された。

従来、本学には、身体障害学生の受入れに関する諸問題について調査、検討を行なう機関として「身体障害者問題委員会」が置かれていた。この委員会では、さらに在籍する身体障害学生の修学及び進路上の問題への助言・指導のあり方についても、検討を重ねてきた。その結果、昭和54年5月に同委員会から総長あてに相談室設置の具申が行なわれ、今回の相談室設置の運びとなったものである。

相談室の業務としては、視覚・聴覚・肢体等の障害あるいは病弱等のために、学生生活上の悩みをかかえる学生の相談に応じ、助言や指導を行なうとともに、教育方法や教育機器の改善などの調査研究を行なうこととしている。具体的には各学部・教養部の教務掛または厚生掛等とも連携を図りつつ、学生の相談に応ずることとなる。

この相談室の運営にあたって、全学的な理解と協力を得るため、各学部・教養部から選出された教官の委員からなる管理運営委員会が置かれている。

（身体障害学生相談室）

共通第1次学力試験の実施計画

昭和56年度の共通第1次学力試験は、昭和56年

1月10日、11日の両日にわたって実施される予定である。

本学においても、4月来、共通第1次学力試験実施委員会および共通第1次学力試験連絡協議会を数回開催し、実施の準備を進めてきた。

本学に協力する大学は、昨年度と同様に京都府立医科大学である。

実施概要は、次のとおりである。

1 試験日時

1月10日（土）	国 語（12：00～13：40）
	理 科（14：30～16：30）
1月11日（日）	社 会（9：00～11：00）
	数 学（12：20～14：00）
	外国語（14：50～16：30）

2 試験場

第1試験場	北部構内
第2試験場	医学部・薬学部構内
第3試験場	本部・教養部構内
第4試験場	京都府立医科大学

3 志願状況

（試験場）	（志願者数）
第1試験場	1,150人
第2試験場	600
第3試験場	4,962
第4試験場	250
計	6,962

4 追試験

昭和56年度の追試験会場は、東海・北陸・近畿地区で1か所となり、京都大学において1月17日（土）、18日（日）に実施される予定である。

<部局の動き>

公開シンポジウム「80年代の母」

学生部学生懇話室と保健管理センターとの共催で、11月15日（午後1時～6時）に附属図書館会議室で、公開シンポジウム「80年代の母」が開催され、約50名の熱心な出席者があり、古い母親像と新しい母親像をめぐって議論が交わされた。

司 会 学生懇話室長 梅本 堯夫
教育学部教授

講演者

「母親としてのスタートをめぐって」

医療技術短期大学部助教授 菅沼美奈子
「幼児教育の立場からみて」

教養部教授 笈田 知義
「おふくろからママへ」

学生懇話室カウンセラー 石井完一郎
助教授

「母の自立と子供の関係」
—女性学の視点から—

評論家 富士谷あつ子
日本女性学会理事長

（学生部学生懇話室）
（保健管理センター）

原子エネルギー研究所公開講演会

原子エネルギー研究所では、創立記念日に毎年、公開講演会を開催しているが、本年も11月28日、午前9時10分から午後4時まで、同研究所において公開講演会を開催した。

演題、講師は、次のとおりであった。

1. 強磁場中での核磁気共鳴 千葉 明朗
2. 並列シミュレータ PACS
について
 - (1)アーキテクチャと応用 星野 力
 - (2)ソフトウエア 佐藤 隆
3. イオン性流体の物性推算 原田 誠
4. 核融合炉における直接エネルギー変換 吉川 潔
5. 原子力プラントの異常診断
システムに関する研究 若林 二郎
(原子エネルギー研究所)

創立15周年を迎えた東南アジア研究センター

創立15年目を迎えた東南アジア研究センターでは、12月6日、関係者多数出席のもとに記念式典を行なった。

東南アジア研究センターの濫觴は、昭和33年秋、東南アジア地域に関する学問的研究がわが学界で著しく立遅れている現状を憂えた学内有志教官を中心に、東南アジア研究委員会が発足した時期にまで遡ることができる。翌昭和34年には、京都大学及び関西諸大学の研究者を中心として東南アジア研究会も組織され、月例の研究会によって、東南アジアを対象とするエリア・スタディーズという新しい学問分野の開拓が、日本ではじめて鼓動しはじめたのである。

さらに、昭和37年6月には、学内に東南アジア研究計画準備委員会が設けられ、本学における東南アジア研究のあり方の基本的諸問題が検討された。なかでも、本学における東南アジア研究が人文・社会・自然の諸科学を包含した総合的・学際的研究であるべきことと、現地におけるフィールド調査を中心に行うことなどがここで確認された。この2点は、今日に至るまで当センターにお

ける研究の原点であり、バックボーンとして継承されてきている。この間、平沢 興総長のタイ国視察など現地諸大学等との協力体制をかためながら、昭和38年1月には学内措置としてのセンター設置の運びとなり、所長には奥田 東農学部長が就任され、次第に研究体制を整え始めた。

このような数年の準備期間を経過して、昭和40年4月に国立学校設置法施行規則による東南アジア地域に関する総合的研究を推進するための組織として、「東南アジア研究センター」の官制化が実現し、初代所長に岩村 忍教授が就任された。その年より数えて本年が15年目に当たるわけである。

当初1部門で出発した当センターは、その後次第に部門を加え、今日では客員2部門を含めて計10部門に資料部と事務部、また海外にふたつの連絡事務所を擁するまでに至っている。また昨年度に新館（東棟）も竣工し、研究機関としての内容・体裁が次第に整いつつある。

この間、センターの研究活動を公表するメディアとしての機関誌『東南アジア研究』は第18巻第3号まで計73冊を発刊し、またモノグラフィとしての和文・英文の『東南アジア研究叢書』は計30冊を刊行した。また当センターの重要な機能のひとつとして、東南アジア諸国を主体に諸外国の研究者との学問的交流も積極的に進められてきた。

ひとつの研究機関にとり15年の年月は決して長いものでない。当センターは15年にしてはほぼ基礎的研究体制を整備しえたというべきで、センターに課せられた地域研究の成果が稔り多いものになるのは、まだこれからであると考えている。

(東南アジア研究センター)



＜紹介＞

理学部・地球物理学研究施設

地球物理学研究施設の本館（表紙写真）は、別府駅から西北約1.5 km、温泉地別府市のほぼ中央にある（別府市野口原）。21,000 m² 余りの所有地の中に赤レンガ造り、延べ1,400 m² の建物があり、別府市民の多くが小学校の頃から遠足で親しんできた施設である。

一般地球物理学研究のほか、火山、温泉、地熱に関する総合的研究を目的とし、地球物理学教室所属の地球物理学研究所として大正15年に開所式があげられた。後に阿蘇の火山研究所と統合して理学部附属火山温泉研究所別府研究所と呼ばれ、さらに、昭和34年、理学部附属地球物理学研究施設として独立し、現在に至っている。専任職員として、教授、助教授各1名と、助手2名、技官、事務官3名が勤務し、温泉の研究とそれに密接に関係する地下水、気象、地震などの観測、研究を継続している。開設以来の特色として、地球物理学的方法によるだけでなく、地球化学、地質学的方法を加えた研究を行なっている。

研究対象は、温泉現象に関係する地層中の地下水や水蒸気の流動が中心で、その流れに影響する水理学的諸因子の研究と共に、地熱条件下で鉱物と共存することにより温泉水の諸性質が作られてゆく過程についても研究を進めている。これらの研究は、現地の観測資料に基づいて進められており、温泉や地熱開発の増大と共にその資料収集範囲も飛躍的に拡大し、現在は数千メートルの深層

に及んでいる。

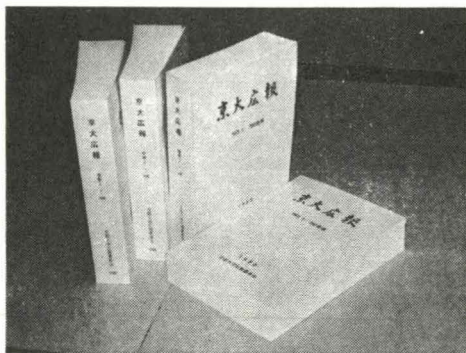
別府温泉は標高1,000 m以上の火山から海岸に至る約40 km² の範囲に2,000個以上の温泉湧出井を持ち、その上流域には100℃以上の蒸気や沸騰水の噴出が見られるなど、一温泉地としての規模の大きさや、泉質、湧出形態の多様さは他に類を見ない。これらの温泉湧出井は一望のもとに見渡せる程度の地域に並んでいるので、温泉生成過程を研究する対象モデル地として最適な条件を備えている。しかも本研究施設の60年に及ぶ観測は、かつての自然湧出泉を中心とした開発初期の頃から始まり、その後、平面的にも立体的にも温泉採取範囲が拡大し続けた全時代を通しての資料を蓄積している。この資料は、現状の観測結果から自然的、定常的な温泉水の流れと、その後に加わった人工的な影響とを分離して研究する上に極めて有用で、このように恵まれた研究環境は世界に類を見ない。

本研究施設は本館のほかに、大分県九重町に飯田観測所を所有している。この近傍には、大岳、八丁原の二つの地熱発電所があり、近年、深層熱水の採取が急速に進んだ地域である。観測所では研究用噴気井の継続観測を行なうと共に、これら地熱開発の資料を収集し、深層熱水の生成、貯留の機構と、その開発が温泉を含めた地下諸条件に及ぼす影響を研究している。さらにこれを拡大し、九重町より別府に至る九州中部地溝帯を一貫した深層地熱の分布域と考え、広域地熱現象の研究に進もうとしている。

（理学部）

このたび、保存用として『京大広報』合本Ⅰを作製し、各部局事務部へ送付しました。この合本は昭和44年5月から昭和55年7月までに発行した本広報 No.1 から No.200 までを、号外を含め原寸のまま写真複製し、掲載記事を事項ごとに分類・整理した事項別索引を付して1冊にまとめたものです。

なお、合本に掲載した事項別索引は別途に配布を予定しています。



訃 報

堀口由次郎（医学部事務官）

11月26日逝去，65歳。昭和20年から医学部に勤務。昭和51年本学永年勤続者表彰（30年勤続），昭和52年度医学教育等関係業務功労者表彰を受ける。

大槻 正男（本学名誉教授・農学博士）

12月8日逝去，85歳。東京帝国大学農学部卒。昭和7年本学農学部教授就任。同33年停年退官。その間評議員（昭和19年～21年）を併任。昭和40年勲二等瑞宝章受章。専門は農業経営学。

日 誌

(1980年11月1日～11月30日)

11月1日 名誉教授懇談会

3日 フィリピン共和国 Philippines 大学長
Emanuel Soriano 氏来学，総長と懇談
および学内施設見学（14日まで）

7日 同和問題委員会

〃 安全委員会

14日 人文科学研究所公開講演会

〃 食糧科学研究所講演会

15日 公開シンポジウム「80年代の母」（学生部
学生懇話室，保健管理センター）

17日 カナダ国 Carleton 大学長 William
Beckel 氏来学，総長と懇談

19日 国際交流委員会

20日 メキシコ国駐日大使 Alejo Ropez 氏来学，
総長および関係教員と懇談

25日 評議会

〃 建築委員会

〃 学位授与式

26日 防火委員会

28日 原子エネルギー研究所公開講演会